

氏 名	ほり うち み お 堀 内 美 緒
学位(専攻分野)	博 士 (農 学)
学 位 記 番 号	農 博 第 1694 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	農 学 研 究 科 森 林 科 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	明治期以降の都市近郊農村における里山ランドスケープ形成に関する研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 森 本 幸 裕 教 授 柴 田 昌 三 教 授 末 原 達 郎

論 文 内 容 の 要 旨

伝統的な農村に見られる集落、森林、農地などの空間要素が一体となった里山ランドスケープは、近年、持続可能なランドスケープのモデルとして「21世紀環境立国戦略」などで注目されている。しかし、土地利用パターンの実態など基礎的データの蓄積は不十分である。本論文は、都市近郊農村を対象に、明治期以降の地域住民による生活・生業を通じた資源利用・管理の実態を空間構造に対応させて明らかにし、一定期間持続的に継承されてきた里山ランドスケープにおける地域住民の資源利用・管理の実像を示すことを目的としている。

第1章では、本論文で用いる里山ランドスケープの言葉の定義を行った上で、その現代的な意義と課題を整理している。また、都市近郊農村の里山ランドスケープに関する既往研究をレビューし、本論文の位置づけと論文の構成を示している。

第2章では、都市近郊農村集落としての滋賀県湖西地域を対象に、地域住民による資源利用と共同管理の明治期以降の変化について、地理情報システムを利用した空間情報の分析や聞き取り調査、文献調査から明らかにしている。すなわち、昭和30年代以前は燃料用割木や建築用材など、都市にその自然資源を供給してきたが、近年求められているのは、良好な住環境や自然とのふれあい機能であり、それが発揮されるためには、住民による資源の持続的な利用と管理が作り出してきた文化的な存在としての里山ランドスケープであることを示唆し、この基礎となる里山ランドスケープを明治期までさかのぼって空間構成要素と資源利用の関係を把握する意義を述べている。

第3章では、明治後期の山林資源利用を、農家と山人（やまど）という主生業の異なる地域住民によって書かれた2冊の日記をもとに明らかにしている。また、日記から抽出した272種類にも及ぶ山林資源利用を空間的な配置から分析した結果、山林資源利用のパターンは地形や宅地からの距離などの空間構造に対応したものであったことを明らかにしている。そして、農家による田畑とのつながりが強い山林資源利用のパターンと、山人による産業的な山林資源利用のパターンは、お互いに分業的な要因となって一集落の里山ランドスケープを形成していたことを示している。

第4章では、上述の日記から、明治後期から大正期の山林資源利用の季節的、あるいはさらに経年的な時間軸上での動態を明らかにしている。文献調査から明治後期から大正期を、集落の共有財産であった共有林が町村の財政的・経済的な基盤として組み入れられていった時代、と位置づけ、対象集落において明治40年頃から新たな資源利用として「村植林」と「桑畑・養蚕」が現れたことを述べ、里山ランドスケープの土地と山林資源の新たな商品化の過程を明らかにしている。この変化に合わせて、植林による財産化など山林資源利用形態が変化した空間がある一方で、従来からの山林資源利用やその季節的なサイクルが変化しなかった空間もあることを明らかにしている。また、この違いは地域住民が立地条件や山林資源の質を主体的に評価選択していた結果だと考察している。

第5章では、資源利用の道具や技術に着目し、地域住民の工夫した道具による資源利用の効率化が土地利用パターンと慣習に与えた影響を取り上げている。対象集落において、昭和20年代まで運搬全般を担っていたのが、丸太輪切り型の車輪をもつ荷車「クルマ」であり、この運搬方法によって山林利用の際の資源採取量や規模が必然的に制限される中で体系化され、

クルマによる運搬が円滑で持続的に行えるように集落内に慣習が存在していたことを明らかにしている。

第6章では、集落独自の利用規制や共同管理に従って山林利用が行われていた時代として、昭和初期までの実態を把握するために、共同管理と里山ランドスケープの関係を主に聞き取り調査から明らかにしている。その結果、集落組織のなかで、住民は役や管理内容に応じてさまざまな形で地域資源の管理に関わっていたことを明らかにした上で、土地利用や標高との関係から共同管理空間と祭祀空間のモデルを提示している。

第7章では、本論文を総括し、今後の持続可能な里山ランドスケープの取扱いの検討を念頭に置き、得られた重要な知見を4点に整理した取りまとめを行っている。

論文審査の結果の要旨

わが国の第2次、3次の「生物多様性国家戦略」では生物多様性の第2の危機として、里地里山（雑木林、田畑、あぜ道、ため池等）など人為的に管理されてきた自然に対する働きかけが減少することによる影響が挙げられている。また「21世紀環境立国戦略」では自然共生型の持続可能なモデルとして、かつての里地里山がとりあげられるなど関心が高まっている。しかしその伝統的土地利用モザイク、つまり里山ランドスケープの実態は必ずしも明らかでない。

本論文は都市近郊農村を対象とし、詳細な聞き取り調査と日記を含む文献調査に空間情報を加えて統合的に分析し、里山ランドスケープ形成と資源利用・管理の実態にアプローチしたもので、評価すべき点は以下のとおりである。

1. 日記や特徴的な道具から地域住民の日常生活における資源利用を定量的に分析し、さらに空間上に再構成して空間的なパターンとして示すという、ユニークな手法を用い、その有効性を示した。

2. 近世の持続的な土地利用が残っていた時代であり、近代化によって社会や産業の大きな変化が起こった重要な画期である明治期に着目し、近代化による里山ランドスケープの資源利用や空間構成要素の変化を明らかにした。近代化の影響の中で、農村の里山ランドスケープの資源が商品化されていく過程や、資源利用の空間配置の変化、それを担う地域住民が集落の里山ランドスケープの中に、政策的な新たな構成要素を導入していく役割や過程を明らかにした。

3. 資源の共同管理と地域住民の関係を独自の視点から分析し、分類した。すなわち既存の集落組織を、資源の共同管理という観点から分類し、共同管理空間の線的、面的な要素を抽出した。異なる空間構成要素が一体的なランドスケープを構成する上では、非日常的な祭祀空間が要として機能していたことをモデルで提示し、地域住民がより主体的に、そして具体的に里山ランドスケープ全体の利用と管理に関わる契機となる要の空間の存在を指摘した。

4. 今後の持続可能な里山ランドスケープ形成にむけて、基礎となる知見を次のように整理した。すなわち持続可能な里山ランドスケープ形成においては、自然条件に適した資源利用や配置が行われていること、主体が資源管理に組み込まれる多様な関係や段階が存在すること、主体が資源を利用・管理する技術も地域固有であって持続性をもつこと、主体と資源が持続的に関わる仕掛けとして非日常的な祭祀空間が効果的でありランドスケープの一体的な管理に役立つことを指摘した。

以上のように、本論文は明治期以降の里山ランドスケープ形成に関する地域住民の生活・生業を通じた資源利用・管理について、日記を含む多様な資料から構造的、定量的かつ空間的にも明らかにしたものである。これは里山ランドスケープの実態に迫るとともにユニークな研究法も開発したもので、環境デザイン学、景観生態学、農村社会学の発展に大きく寄与すると考えられる。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成20年2月8日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。